Osaka Shoin Women's University Repository

関西文学遺跡　その3

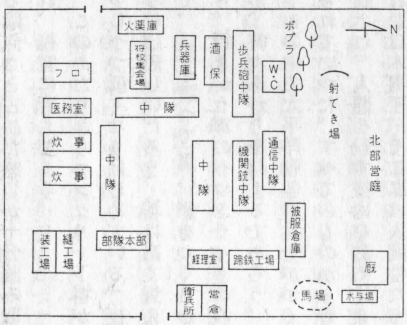
「真空地帯」の舞台大阪城周辺

文　北沢洋子
カメラ　奥田まゆみ

夏の暑さが時間を追つて感じられる頃、私達は国鉄環状線森ノ宮駅で下車、大阪城へ向つた。まだ稚い植樹が、三角垂、四角垂に支柱で支えられている。これからようやく整備されようという駅前の入口である。私達は、大阪城を右手に見ながら西に向かう。左手は、道路拡張と地下鉄建設工事の為、ブルドーザーが、その合間をぬつて走る車が、ごつたがえしている。このような光景は、大阪中いたるところに見受けられる。万国博覧会の為である。地下鉄入口の真新しさが目をひく。これを横目にみながら、大阪城の意外な高さを感じる。焦せる心を抑えながら歩いてゆくと、七・八メートルはあるだろうコンクリート塀が重苦しく視界を遮つた。すがりつくすべもない、コンクリート独特の色。何を見せまいとするのか、と思わせる無気味さである。場所こそ違え、宮本百合子が夫の顕治に面会を求めた時も、このような所を一人で歩いていつたのだろうかと「播州平野」の一部分を思い起こさせる。これはまさに軍国の遺物である。この辺一体が「真空地帯」の舞台である。兵営があり、数数の軍事施設が、かつてこのあたりを領していたのである。ポプラ並木の青い葉は、時おり吹く風に揺れている。九時すぎの舗道は、汗をうつすら滲ませる。コンクリート塀の下に雑草が茂つている。その中に小さな石標が立つている。「陸軍用地」と刻み込まれている。「真空地帯」のあらすじを思い浮かべる。

じりじりストーブの上でこげる餅の匂いは曽田一等兵を、彼が「真空管」と呼んでいる、「兵営」の外側へつれだした。彼は

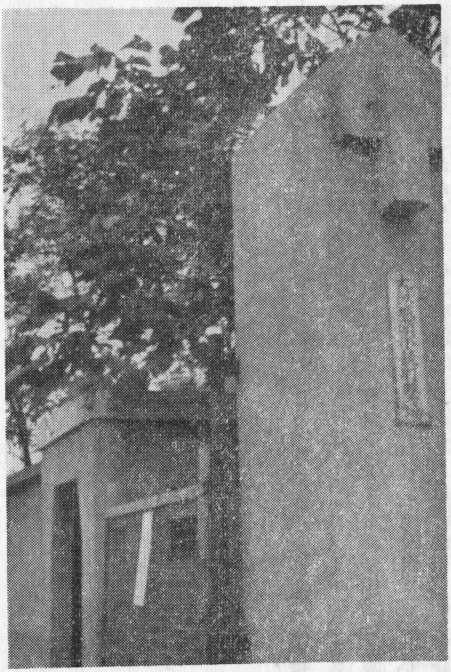
「真空地帯」の舞台



Osaka Shoin Women's University Repository

大きい呼吸をしてその匂いを二、三度つよくすいこんだ。餅は兵営のうちにはなく、外部にあるものだつた。それは真空の外のものだつた。(今年は正月にも餅は支給されなかつた。……。——このように兵営はいよいよその真空度をましていると彼は考えていた。)それ故彼はこうしてその匂いをすい込んでいると自分が空気中に口をだしてぱくぱくやつている金魚のような気がした。

赤レンガの門が続く高いコンクリート塀を切り離していた。「大阪城南小銃射撃場」の文字がはめられていた。門から窺うと何も見えない、赤レンガの建物を除いては。ところどころレンガを繋合わせているセメントがとれている。戦前の建物にある陰気さと古びた感じが十分読み取れ、視覚に訴えてくる。



大阪城南小銃射撃場

このあたりからコンクリート塀が少しづつ低くなりはじめている。夜歩けば恐しいだろう。塀は高く聳えて、光を遮つて黒い影をつくるから。行きかう車のヘッドライトのみが、時々あかりを与えるであろう。

この中で太平洋戦争の兵士がつくられていつた。すべてのものから遮断され、人間を殺す技術を教え込まれた日本男子。そこには人間性など存在しなかつた。軍隊という組織に人間性が吸いとられていつた。兵営にいるのは、ひからびた人間どもだ。田曽一等兵は、そんな所を真空管と呼んだ。これは適切な表現であると思われる。人間が人間として生きてゆくのに必要なものを人間から奪つてゆくのである。真空地帯には、聖軍とか皇軍とか呼ばれるにふさわしくない人間関係・勢力争いが、一層そうならしめたのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

高い塀も徐々に低くなり、高さ二メートルぐらいの所でと切れ木々が続く。

教育塔がそこにある。明治五年学制領布以来その職に殉じた教員及び不慮の難にたおれた学生・生徒・児童を合祀するために昭和十一年十月三十日帝国教育会が建立し……その英霊を慰め、その清純至高の教育精神を表彰するものである。……。と刻んである。

西の丸庭園前市立大阪公園事務所

曽田は教員だつた。その年、はじめて学徒出陣がおこなわれた。弓山、安西などが学徒出陣兵として登場する。学業を半ばにして兵士になり（昇級が優遇されたとは言え）死んでいつた学生達。

大手門から大阪城に入る。巨石が目にはいる。黒く焼けただれた部分もある、城内の石垣は修理中で××建設株式会社の綿布で被われていた。だが石の大きさは、私達に威圧をもつてのぞんで来た。この巨石は畳三十三枚以上の面積で桜門と共に一番大きいそうだ。桝形の多聞櫓を通つて、左手には入場料のいる西の丸庭園、右手は市立大阪公園事務所。

事務所は終戦前までは、陸軍の司団司令部又は経理部のあつたところと思われる。赤レンガの建物、アーチ形の窓、セメントとレンガのほかは何も色どりをそえない。事務員の影がひつそりと動いている。ここから陸軍の司令が出され、兵士の運命が決められていつたのだろう。木谷の裁判も南方行きも、兵士の外出も。経理部「真空地帯」の一つの事件の発端となる場であり、ここから物語は一丁四方の連隊に広がつてゆくのだ。下士官が権力を握るのに絶好の場であつた。故に一番腐敗した所でもあつた。その為苦しめられたのは一般兵士である。

木谷が二年の刑を終つて陸軍刑務所から自分の中隊にかえつてきたとき、部隊の様子は彼が部隊本部経理室の使役兵として勤務中に逮捕され憲兵につれられて師団司令部軍法会議に向つたときとは全く変わつてしまつて

Osaka Shoin Women's University Repository

いた。

この長い一連の文章には外面的な現われだけでなく、そこに内在する世界の生起するものまで精細に描きだそうとしている。二年間にどのように変わつたか。

彼は二年前軍隊にはいつてからはじめて巻脚絆をつけることなく衛門をつれ出されたが、巻脚絆も帯剣もつけない代わりに上衣の下に隠のた両手に手錠を、その腰に捕縄をつけた身体をふつて見上げた衛門横のポプラの木はいまでは切り倒されていた。彼と共に入営した現役兵は大半中支へ渡つてしまつており、部隊には次々と召集された幾種類もの補充兵の他に第一回学徒出陣兵がはいつていた。

この野間氏における描写は、一見無秩序なほど煩雑をきわめ、読者にもう一度咀嚼を要求する。勝手を知らない者には、大変読みづらい。木谷が入営した時と、二年後に刑務所から帰つて来た時とが同時点において比較されている。外界の変化であるポプラの変化・学徒出陣によつて戦局が二年間にいかに大きく変化したか。これは野間氏の『人間を内面的に追求する方法を見い出そうと努力した』一つのあらわれではないかと思うのである。

経理部は下士官・将校達の勢力の源泉でもあつた。又源泉を支配する事で私腹を肥やし部下に気まえのいいところを見せようとする悪質の上官、それに取り入ろうとする部下、当然おこつてくる士官同志の争い。これに巻き込まれたのが木谷であり、対立に敗れたのが林中尉であつた。

そのような場面を思い浮べて大阪城内をめぐつていると、その雑然たる周囲の姿が気になつてきた。天守閣の前に店が二軒。建物はコンクリートで古風をよそおつてはいるが、雑然とおかれた品物、立て看板の乱立は、古城の雰囲気を破つてしまつている。城らしい落ちつきを失わせている。天守閣から少し下つて、山里跡にきた。城主・城主夫人の居館のあつた所だ。秀吉公・北政所が花見をし、秀頼・淀君が自刃した所だ、と立札がしてあつた。繁栄の花見と自滅とが同居している。これは自然の法則だと仏教では言う。

〃盛者必衰〃と〃おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ〃そこから見える大阪は戦前の面影を何も残していない。ただ「自衛隊大阪地方連絡部」のレンガの建物があるだけ。日の丸と朝日の旗が空に飜つているだけである。極楽橋を渡り堀沿いに京橋口に出る。

府庁前のアスファルトをジープが通る。アーチ形のレンガの門をくぐつた。南側に明治天皇聖蹟の之の標がたつている。自衛隊員募集の白布

Osaka Shoin Women's University Repository

が赤レンガにはえていた。

戦前は、この城を中心に東には砲兵工廠が、南には陸軍被服支部・歩兵第八聯隊が、西には府庁と憲兵隊・旅団司令部があつた。軍隊内務書綱領には〝兵営ハ苦楽ヲ共ニシ死生ヲ同ウスル軍人ノ家庭ニシテ兵営生活ノ要ハ起居ノ間軍人精神ヲ涵養シ軍紀ニ慣熟セシメ鞏固ナル団結ヲ完成スルニ在リ〟とあるのを曽田は〝兵営ハ条文ト柵ニトリマカレタ一丁四方ノ空間ニシテ、強力ナ圧力ニヨリツクラレタ抽象的社会デアル。人間ハコノナカニアツテ人間ノ要素ヲ取リ去ラレテ兵隊ニナル〟と置きかえている。

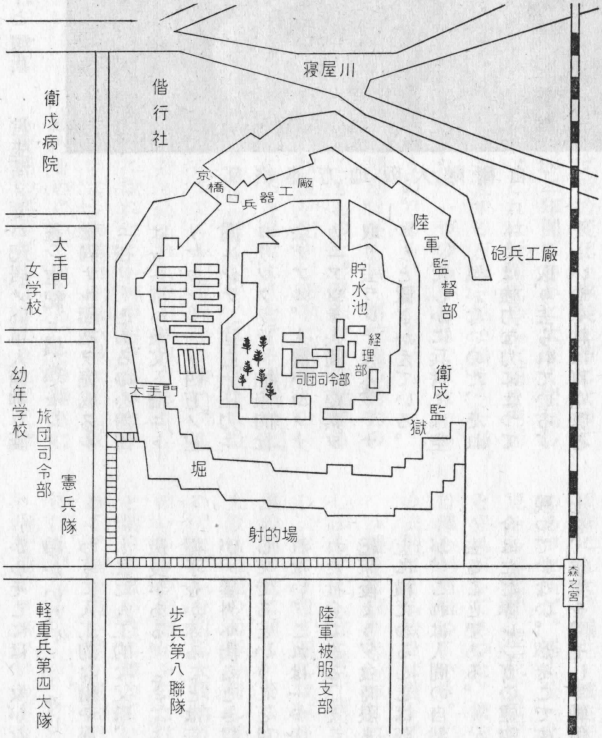
自衛隊大阪地方連絡部

たしかに兵営には空気がないのだ、それは強力な力によつて取り去られている、いやそれは真空管というよりも、むしろ真空管をこさえあげるところだ。真空地帯だ。……。曽田は一丁四方のなかをぐるぐる歩くのだ。そこには山もないし海もない。しかしそこには、女がなく父母兄弟がいない……そしてその代わりに人工的な山や海があり……また人工的な父母、中隊長と班長がある。そこでは屋内で帽子をかぶることは許されないが、屋外へ出るときは帽子なくしてでるということはまた許されない。これは一つの強制せられた社会である。そこではまた起床後より夕食時限までは寝台上に横たわることは許されないが、これは人間の自然をうばい去ることである。

今はただ赤レンガの建物より他に残つていない。がそこで生活した兵士を、学生を、そして戦争する人間に再生していつた軍隊を思いやつた。今は車が、人が見物に訪れる。大部分の観光客は豊臣秀吉の築いた

Osaka Shoin Women's University Repository

城の偉大さを見て帰るであろう。巨石を見てその財力と秀吉の権力の強さを感じるであろう。しかしその後陸軍の司令部がおかれ、日本人が戦争にかりたてられたその内容を誰が想像しようか。



大阪城を中心として存在した軍事施設